

LET 関東支部だより

外国語教育メディア学会

第46号

2011年6月発行

.....

本号の内容

支部研究大会報告 1 (第 124 回大会)	p. 1
支部研究大会報告 2 (第 125 回大会)	p. 2
全国研究大会報告	p. 3
哀悼	p. 6
研修研究部会便り	p. 7

支部研究大会報告 1

LET 関東支部第 124 回 (2010 年度) 研究大会報告

生田 裕子 (文教大学)



受付の様子 大東文化大学板橋キャンパス

2010年6月5日(土曜日)に大東文化大学板橋キャンパスにて、関東支部第124回(2010年度)研究大会と総会を開催しました。当日の来場者は、119名(一般53名、学生3名、当日会員39名、賛助会員24名)でした。

大会テーマは、昨年度からのシリーズ企画、「インプットからアウトプットにつなげる指導」、今回は特に第2言語習得(SLA)の視点をふまえて、音声と意味習得、発話に至る外国語学習過程のまだ科学的に解明できていない謎について考えを深める絶好の機会となりました。特別講演者として、SLA研究の分野で活躍されているお二人を迎えました。早稲田大学教授の原田哲男先生には、「第2言語の音声習得と音声指導」について、ご自身の音声研究の分析結果から

音声教育への示唆に富む仮説と理論をうかがい、特に教師自らが音声学、音韻学の正確な知識を習得することの重要性に気づかされたように思います。ピッツバーグ大学教授の白井恭弘先生は、個人差があると思われがちである外国語学習の要因について、もっと科学的な根拠のある研究を行う必要性と、研究結果に基づく学習動機付けや学習方法の現場での応用、特にCALL環境を利用した個別学習の意義について語られました。お二人の対談では、効果的に言語の音声習得をするために、共にメディア環境を利用する言語教育と研究の将来性にも触れてくださったことが印象的でした。

参加者からは、講演への多くのポジティブな感想がよせられました。

「先生方の講演から多くの知識だけでなく、沢山のエネルギーをいただきました。学ぶ・知って本当に楽しいものですね。」(I先生)「講師の方々のお話し、とてもよかったです。感動しました。よい企画をありがとうございました。」これらは、大会の企画を考えたメンバーにとり、本当に元気づけられる言葉です。最後になりましたが、会場校としてご準備くださった大東文化大学の田口先生を初め、事務局、大会企画・運営に献身的な働きをくださったLET会員の先生方のご協力にここから感謝申し上げます。

LET 関東支部第 125 回 (2010 年度) 研究大会報告

神田 明延 (首都大学東京)

今年度は夏に 50 周年の盛大な全国大会を関東で開き、通常では秋の大会は開催しないことになっていますが、来年の支部大会まで時間が空くことや、各研究部会や研究プロジェクトに発表の場を提供することなどの理由で、開催する運びになりました。また、秋は関東エリアからなるべく遠くに開催地を移していましたが、今回は関東しかも都内、その名も首都大学東京 (南大沢キャンパス) で 12 月 4 日(土)に開催することになりました。

またもう一つ今回の支部大会の特徴として、大会テーマを設けず、研究部会やプロジェクトをメインとしたことで、結果として多様な企画・テーマを受け入れることができました。その一つ目は、午前中に開かれた e ラーニング研究研修部会企画のワークショップ「クラウド・コンピューティングとしての Google の授業利用」です。これは CALL 教室におけるハンズオンのワークショップで、クラウド (Cloud) と呼ばれるサーバー群にデータを置くことを中心に据えたコンピュータ利用を、モバイル機器との連携で、いかに簡易に教育に役立てるかを Google のサービスを例に取り、分かり易く学べたようです。ワークショップらしく、参加者からも多くの建設的な意見が寄せられ、講師側も学べる企画となりました。

昼食・企業展示の後の午後のセッションではまず研究プロジェクトの発表である授業研究：「小学校外国語活動におけるアクションリサーチー荒川区立峽田小学校での実践を通してー」に多くの参加者を見ました。長期にわたる小学校における英語活動の研究手法や研究成果について活発な議論が、会場からも交わされました。

またそれに続く早期外国語学習研究研修部会企画：「小学校外国語活動：電子黒板を活用する授業づくり」では実際に電子黒板を実演しながら、小学校の英語活動に利用した現場教師の方の実践報告と、それを指導援助した大学教員による授業設計の説明などがあり、参加する人の興味を引きました。これらのセッションでは特に現役学生の参加者が多く、将来が楽しみなところでした。

その他、午前・午後には一般の研究発表・実践報告も 7 本あり、その内容も CALL 教材開発、ライティング活動、リーディング指導、シャドーイングウェブ教材、音声データベース、Moodle、コーパスなど様々な分野に及び、多くの方の参加を見ました。

総勢で 100 名を超える参加者でしたが、閉会行事の後、数十名で学内のレストランにて懇親会を催しました。そこは学内とは言え、一般の方の利用も多い評判の高いレストランで、歓談して、研究交流を深めた夕べでありました。

以上、年末にかかってしまった秋の研究大会でしたが、多くの参加を見て、また多様なテーマを持った研究を一同に揃えることができ、充実した一日でした。



ワークショップ



授業研究



早期外国語学習研究部会企画

2010年度の全国研究大会は関東支部が担当しました。大会実行委員長の湯舟先生からご報告をいただいています。

LET50周年記念全国研究大会を終えて

湯舟 英一（東洋大学）

WorldCALL 2008 が終って間もない秋のある日、支部長、副支部長ら関係者が集まり、2010年のLET全国大会を関東支部が担当するに当たり、最初の会合が持たれた。全国大会を関東で行う場合はその年の秋の大会は開催しないという慣例から、当時秋の大会を担当していた企画B班担当副支部長であった私が実行委員長に任命された。当初はほんでもない仕事を引き受けてしまったと自分や周りを責めた。しかし、その後、小池生夫評議員から「LETの50周年記念大会を開催するのか、50回目の大会を行うのか」と問われ、ふと我に返った。引き受けたからには、成功させた方がいいに決まっている。さらに、その後、開催資金が潤沢なことも分かり、生来金を貯める才能は無いが使うのだけは得意であった私は、気持ちを入れ替え、晴れて大会準備に着手することになった。ちなみに、2010年の秋の大会は12月に首都大学東京で成功裏に行われた。

私はこれまで「何か持っている」と言われ続けたことは一度もないが、それでも関東支部には沢山の「仲間」と諸先輩の先生方がいた。実際、実行委員会の皆さんの献身的な仕事とシニアの先生方からのアドバイスにより、徐々に記念大会らしい内容になっていった。大会に関係された内外の皆様へのお礼の言葉は、本部発行の*News Letter*の中で書かせて頂いたので、以下では関東支部の大会実行委員会のメンバーひとり一人への感謝の気持ちを書かせて頂くことにする。

まず、大会事務局長の奥総一郎先生と会場校の横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校の西堀雅明先生は準備から大会当日まで長く大変な仕事を果たされた。奥先生は大会事務局の仕事の他、企画、発表者の苦情処理、アルバイト統括に加え、自ら大会HPの作成と運営を買って出て頂いた。今はただ心からお疲れ様と言いたい。一方、西堀先生は3日間も学校をお借りする為に、他教員や事務の方々と粘り強い折衝をされ、さらに大会当日は連日の高校見学ツアーで自らメガホンを持ってツアーコンダクターまでされた。さすがに全国から見学者や取材が後を絶たない話題校だけに、慣れた口調で、その姿は堂に入っていた。



会場となった横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校

次に、大会事務局長補佐として、千葉敦先生と下山幸成先生の名前を忘れてはならない。両者とも私とよくスキーに出かけた勝手知った仲である。千葉先生は前回の全国大会のときの大会事務局長としての経験から、プログラム編集や要綱の出版などを抜群の安定感で担当された。一方、下山先生は、ワークショップと当日の受付業務の一切を仕切るとともに、30社を超える展示業者との折衝やラリー企画に自ら進ん

で尽力された。

また、会計は佐藤明彦先生にお願いしたが、そのきっちりした仕事は大学の教員にしておくのは勿体ない程であった。プログラムの大綱作成は私と奥先生で担当したが、発表部屋割りには山口高嶺先生が一人で担当された。山口先生はプログラムの仕事以外にも会場機器担当や早稲田 ICT 関係のシンポジウムの窓口となって多方面で活躍された。またプログラム冊子作成の大役はワークショップ委員でもあった神田明延先生が担当された。

今回は記念大会ということもあり、100 件を優に超える発表応募があった。発表審査は大会委員長の見上晃先生以下、森田彰先生、小原平先生、狩野紀子先生、神田明延先生、飛田ルミ先生、磯田貴道先生、土屋武久先生、久保田章先生、保崎則雄先生、吉成雄一郎先生の 11 名の先生方が担当された。厳正な審査の下、公募シンポとポスターを合わせ 96 件の採択を得て、記念大会に相応しい賑やかな発表会場となった。

50 周年大会の目玉の一つが記念式典と懇親会であった。当日の段取りは、教員になっていなければホテルマンになったかも知れないという黄金井健夫先生に、司会は前田道代先生とマルセル先生が担当され、インターナショナルな雰囲気で行われた。また滝本晴男先生は会場の BGV として LET の歴史を物語る LL や CALL 教室のビデオを作成され、ビデオは当日会場で流され、LET らしさが大いに演出された。会場は飛田ルミ先生のご紹介で、先日の APEC 会場にもなった、横浜みなとみらいの豪華ホテルに決まった。飛田先生はホテルとの折衝に加え、ほとんどの手配も尽力された。会場校からホテルへの移動では、バスガイドによる横浜市内観光で遠足気分の非日常感を創り出し、夢のような 2 時間の始まりを演出した。車内では飛田先生ご自身もマイクを握り、往年のアイドル時代を髣髴させていた。また、余興の「変面」は狩野紀子先生が折衝に当たられた。狩野先生には、中国文化との異文化コミュニケーションや役者のドタキャンなどで多大な心労をお掛けしてしまった。しかし、本番の演技は神秘的かつユーモラスで、まさに大会 3 日間の最高潮の瞬間であった。



LET50 周年記念式典での一場面

さて、今回の大会会場で一際印象に残っているのが、大会役員の着ていた青い LET50 の T シャツではないだろうか。T シャツ作成では、受付やポスター作成も担当された藤本敦史先生が大活躍された。お陰さまで、大会 T シャツは人気のため完売した色もあった。

その T シャツを大変気に入られていたのが IALLT の先生方であった。今回は 8 名の IALLT メンバーが来日し、そのうち 5 名がシンポジウムなどのプログラムに登壇された。2 日目のシンポでは、国際交流委員の土屋武久先生と生田祐子先生が司会を努められた。IALLT の方々との折衝は WorldCALL で彼らと仕事をされてきた岩崎暁男先生が担当された。成田への出迎え



青の大会 T シャツを着たスタッフ

は、大会会長の見上晃先生と大八木廣人名誉会長が向かわれ、またホテルでは岩崎先生とシニアの石川達朗先生も同伴され、大会中も付ききりの世話をされた。

会場と発表機器は、広島から駆けつけて下さった磯田貴道先生を中心に、会場校の西堀雅明先生、山口高嶺先生、原田慎一先生、今野勝幸先生、小林玲浩先生、関口貴央さんが担当された。連日早朝から夜遅くの居酒屋ミーティングまで、大変お疲れ様でした。お陰さまで、大会 3 日間を通して大きなトラブルもなく、大会をがっちり支えてくださった。

受付を担当されたのは、下山先生以下、大御所の香取久子先生、弁当の売り子姿も板についていたフェ

アバックス香織先生、藤本敦史先生、二宮正男先生、跡部智先生など、皆さんTシャツ姿で若々しく張り切って仕事をされていて、いつになく楽しい受付風景であった。展示会場では担当の南紀子先生と飛田先生が巡回して頂いた。南先生には展示の場所決めでも大変ご苦勞を頂いた。ラリーの抽選会場では、あの淡路佳昌先生が大きな声で大当たりの鐘を鳴らしておられたのが微笑ましかった。また、院生の朝熊悠さんもラリーや受付に活躍された。朝熊さんは森田先生や西堀先生の癒し系の似顔絵で受付回りを盛り上げて頂いた。最終日のクロークは WorldCALL のクロークでも活躍された小原平先生が手馴れた手つきで担当された。小原先生は大会実行副委員長として、終始メンバーの心の支えとなって頂いた。最後に、記録写真とビデオ撮影は、保崎則雄先生と早稲田の学生さん2名が3日間を通して担当され、貴重な記録を残して頂いた。

以上、大会実行委員会の各メンバーが実際に果たされた仕事のほんの一部を紹介させて頂いた。何より、実行委員会の皆さん一人ひとりが、LET の 50 周年大会を成功させたいという気持ちで、積極的に働いてくださったことが素晴らしくまた嬉しかった。結果、多くの参加者を得て、記憶に残る記念大会となった。しかし、私にとって一番の収穫は、この関東支部の実行委員の皆さんとの絆と結束が得られたことだと思っている。末筆ながら、LET50 周年記念大会の開催にご協力頂いたすべての皆様に、心より感謝とお礼を申し上げたい。



熱心な議論が行われたポスターセッション



研究発表に耳を傾ける参加者たち

哀悼

2010年11月2日、元関東支部支部長の鈴木博先生がご逝去されました。見上晃前支部長に思い出を綴っていただきました。

鈴木先生との出会い

見上 晃（拓殖大学）

大学に入学して半年経って、後期の授業にゼミを選択できることになりました。いくつかのゼミの中に英語のゼミを発見し教室に行ってみると学生で教室が溢れていました。しかも同年代の学生が「このゼミは秋の合宿の延長なので新規の方は履修出来ない」というようなことを言っていました。すると小柄な先生が「できるだけ取れるように」とおっしゃり、結局ゼミなのに2教室でネイティブの先生とその先生が交代で授業をしてくださることになりました。これが鈴木先生との出会いになりました。

翌年の4月から少人数授業を選択できることになり迷わず鈴木先生のLS (Listening & Speaking) の授業を履修しました。夏休み前の授業中に、「夏休み中にITC (Intensive Training Camp) をするので誰か参加しませんか」という告知があり、飛びついて参加しました。COLTDという団体が主催するITCでそこでは後にお世話になる先生方とお会いする機会がありました。合宿中は英語のみ、24時間英語漬けという環境で英語が「教科」から「言語」へと変わりました。

当時の大学のLL教室は大きな教室の前半分にAAC型の授業ができるオープンTRが設置され、後ろ半分には通常の机にジャックがついたAA型教室になっていました。教室のAAC機器をオープンリールのテープレコーダ(TR)からカセットのTRへと変更し、教員用のマニュアルを作成するということになりその手伝いをさせていただきました。鈴木先生が東大に移られたのはLL教室の整備なども理由の一つだったと今年の夏に先生と当時のお話をしたときに聞いて、手伝わせていただけたことは幸運だったと思っています。こうして私の中では、機器を使った英語授業への思いが膨らんでいきました。

その後も、鈴木先生とは親しくさせていただき、後期に「予算が下りたから」とオープンリールのカラーVTRとカメラ、編集機器のセットが購入でき、使い方の研究や、教材の作製などを、当時すでに今にも潰れそうだった第一研究室で行って行きました。オープンリールのVTRは始めてみた機器でしたからその構造や動作には大変興味をもち、カラーなのに白黒部分を入れるなどして教材作成の面白さも体験させていただきました。

理学部に進学後、機器を利用した英語授業への思いは捨てきれません。学部をやめて転部しようと思い、鈴木先生に相談したところ、「学士入学という手段があるよ」と教えていただき、理学部卒業後に、教養学部に入り直しをしました。卒論のテーマを「リスナビリティスコア」に絞ったのも鈴木先生の「リーダビリティはあるけど」という発言にヒントを得たものでした。卒論を作成中にVSC (Variable Speech Controller) の話を聞きに当時NHKにいらっしゃった宇佐美さんのところに伺ったのがLLA (当時) へ入るきっかけになりました。

このように鈴木先生との出会いは、言語としての英語との出会いであり、機器を使った英語授業との出会いであり、LETとの出会いでありました。私が支部長になってからも支部大会に参加され精神的な心の支えとなっただけではありません。

すばらしい出会いを、ありがとうございました。



第117回関東支部大会での鈴木先生（左から1番目）

音声・映像研究研修部会

飛田 ルミ（足利工業大学）
南 紀子（創価女子短期大学）
木村美由紀（東京慈恵会医科大学）

2010年度は第1回研修会を6月28日（土）に横浜サイエンスフロンティア高等学校で、第2回研修会を1月29日（土）に拓殖大学八王子キャンパスで開催しました。講師及び内容は以下の通りです。

第1回目の研修会は、「音声指導における映画、e-Learning教材利用に関して」というテーマのもと3部構成で行いました。

1) 藤田雅也氏（HOYA サービス株式会社）が「魔法の読上げソフトウェア "Global voice English"」というタイトルで、音声合成ソフト：TTS(Text-To-Speech)の一つである Gloval voice English の授業使用例についてご説明くださいました。

2) 東 健一氏（株式会社アルク教育社）が「ALC NetAcademy2 について」というタイトルで、NetAcademy2 に搭載されている様々な新機能をご紹介くださいました。

3) 鈴木 政浩先生（西武文理大学）が「洋画のセリフを朗読するための音声指導アラカルト」というタイトルで、映画（Patch Adams）を用いた音声指導に関して実践例を発表して戴きました。発表に引き続き、音声指導に関してディスカッションを行い、活発な質疑応答が行われました。

第2回目の研修会は、見上晃先生（拓殖大学）が「私の発音ゼミ授業」というテーマのもと、3年生のゼミ授業で実践なさっている発音指導についてご紹介戴きました。

前半は、リズムボードとフレーズ集を利用して、よりネイティブに近い発音目指した画期的な発音練習法についてデモンストレーションを伴いご紹介下さいました。後半は映画のアフレコ学習に関して、練習風景の映像を伴い詳細にご紹介くださいました。練習の手順は以下の通りです。①学生に10本程度のDVDから、好きな場面を選んで録音させて、学生にオリジナルの SCRIPT を作成させます。②3人一組（ゼミ総人数15名）になり、アフレコ練習を実施します。③十分な練習を行った後、学生のアフレコをVHSに録画します。④全員のビデオを、最終授業時間に試聴します。

発表に引き続き、音声指導に関して活発な質疑応答が約1時間近く行われました。

改めまして、2010年度の研修会にご参加、ご協力下さいました皆様に厚くお礼申し上げます。2011年度も、会員の皆様のニーズに合った研修会を開催する予定でありますので、皆様のご意見、ご参加をお待ちしております。



教材教授法研究研修部会

久保田 章 (筑波大学)

活動の目的

LET関東支部には、他にeラーニング部会や音声・映像部会がありますので、当部会では必ずしも教育機器やそれを用いた授業に限定せずに、より広い視野から外国語(特に英語)の教材や指導について研究することを目的としています。したがって、一般的な授業の主教材である教科書や伝統的な「紙と鉛筆」による授業も研究の対象に含まれます。

そのような背景に基づき、今年度は、特に(1)教科書分析の基本原理や実証的アプローチの方法と(2)言語の形式や機能の効果的な指導と教師の役割の2つを研究テーマとして設定しました。

活動の内容

現在、部会員は9人です。本年度は講師を招聘しての研修会は開催せず、上の研究テーマについて有志による勉強会を、筑波大学において、ほぼ月に一度の割合で実施しました。勉強会は、論文紹介や研究発表、及びその後の質疑応答、情報交換で構成されています。

今年度の主な研究発表の課題は、「高校英語教科書におけるライティング課題の比較分析」、「大学スピーキング教科書における談話標識の構造と分布」、「英語教育における児童文学作品の活用の可能性」、「中学校のライティングにおける文法指導の効果」、「気づきを誘発するリスニング・タスクの開発と指導」、「特別支援学校の英語授業における教師の意識とフィードバック」、「中学校の英語授業における教師のフィードバックの効果」、「日本人英語学習者の動機付けにおけるL2自己の重要性」でした。

毎回理論と実践両面に関して多角的な観点から活発な議論が展開され、長いときは2時間以上に及ぶこともありました。発表の中には、その成果が論文や学会発表の形で結実したものもあります。



学習環境研究研修部会

石川 洋一（日米会話学院）

従来は、LL 関係の機器をどのように選びそしてうまく使って行くか、ついてHP上でレポートを公開していくという形での活動の中心でしたが、他の分野にも少し目を向けてみようと考えています。

今のところ、考えているのは

- USTREAM で実況中継
- 災害時の連絡、何が一番速かったか（固定電話、携帯、メール、ゲーム？）

USTREAM は、PC さえあればミーティングや Live 演奏をネット経由で簡単に実況中継できるのでサテライト授業なんてことが考えられます。それもかなり安価に。

災害時の連絡方法、意外にも速かったのは何か、これは興味ある問題です。
上記以外のものもいろいろ検討を加えて生きたいと思っています。

ほか、従来の機器についても続報という形でレポートを続けて生きたいと考えています。よろしくお願いたします。

（文責：日米会話学院視聴覚室：石川）

編集後記

★ 前号から大変長い期間をあけてしまいました、「支部便り第 46 号」をお届けすることができました。執筆者の皆さんには、早い段階で原稿をいただいていたのにもかかわらず、発行が遅れてしまい大変ご迷惑をおかけしてしまいました。誠に申し訳ございません。

さて、支部便りが滞っていたのとは対照的に、関東支部は活発に活動を続けております。先日も第 126 回の研究大会が盛会のうちに執り行われました。秋の大会は 11 月 12 日（土）に拓殖大学文教キャンパスで開催されます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。